開卷驚奇俠客傳

第四集

壹

へ乙13
1245
16

へ 13
1245
16

曲亭翁
編演
開巻驚奇
俠客傳第四集

印度異獸夜分圖
蘭呼ロイアールト

二世 柳川重信画
書林 羣玉堂精刊

俠客傳第四集引 善福堂

中納言藤房卿。遁世以後事。太平記天正本。及吉野拾遺粗載之。然而所履歴未詳。参考太平記天正本曰。藤房遁世ノ後。朝廷弥危キニ近カラントスルコト多ケレハ。天下又静ナラス。此人終ニ散聖道人ト成テ。侃山子トヲ申ケル。江湖遍参シ玉ヒシカ。土州下向ノ時。船中ニテ風波ノ難ニ侵サレ。帰泉シヌルコソ哀レナレ。吉野拾遺ニ云。刑部卿義助朝臣の。越前国より来まゐり物かたりに。あちせんのあたりなる山にさらくそいさちく。城郭よりはるべき処なりけれは。六郎左衛門時義とらふのよまのゝせけるよおもいをあらんあるよ。彼おくふくるけ入りけるよ。谷川のいとしたくゝそれゝるけ。そのみるゝとゝろの予りけるよさゝ出る岩をかゝとりて。松の影ふかくぬれたる庵のゝえけるをかる処ゆも住む人の有りけるゆや。とゝちよりてゝ伺れは。木の葉をあつめてむすとゝ。ひゝらかる石の上に法華経を置たけるゝ。何もゝをえぬ。ゝゝ。みけるよ山路をたとり来るとゝれい。盗せおとゝ。ゝゝ。ゝとりのくかれゝるゝ。谷川の水をむすひく。庵の内よへく。経のひもをとけるはゝゝ。とゝ。ゝみゝゝめ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ

かへりくさのくさ藤房卿の御面影ーくく伝るとらひーまくよいとゆうーくく一條少將を
そのあひてまわりけるか庵はそのまくありくく僧はなえ拾ふも経のあつる石と泛こえーよ
おくのまこう泛世の人はとひれはそゝゆく雲よりもとのとあそんとうたつけあるる筆はあとをおれ
のくやえ彩のあひくそのあの山々とうるさせあひけれとも学よりえあつひいとおいるくとのこまひ
あるく人々なもあへも涙落ーくけり所もいみてかりける人の学ーくあとの四位ひは誠よりあくこ元位
心よそ年月をあいせくくえ待るよ君うもむ宿とらひこされ後のあえ越のくさよりはくくへ通り
ゆくくんれあめや其後は絶くれおこうれもやえさうー此藤房は大納言宣房の子ゆて才智世ふ
もえ気強ひくく君ゆ所ゆえ流くくも中納言まくくよ成ゆひくは建武さのえ戌の春ゆくくく
世と捨ゆひ之次の段よ又云ふ和ーあろ大納言実世卿のれのとくくとくくのゆえりくゆ来ーりけ
ゆくえくまりせけれは君うもむ宿のあうを東くくたれいむくくよぬくも墨をえの紬とはるくく
よ跡ゆむくくよかくくゆをおれとおとうをせゆひくくはは使のうくくはめくくよをそ問せゆくを今朝西ふる
野よ出くく草をかり待るよやせおとうへくるもきゆ者の世ふをそけくと仰さくくひーといふ
いそれ皇居へまりのくくく大和さの國かくち関々よみとのくくくまさゆう者やをとくあ
けれとも それとあ月記ゆめくれくけら藤房入道のゆみゆを有りける已上全文を録も右の
太平記天正本は載もる所と合考れは事迹くく喩合もそくとあくれるよ似る。常陸州藤澤神宮寺什物有
卿遺墨焉。當時卿經過其地。淹留數日于茲。手抄
殘缺。今猶存焉。雖玉石未辨而寺說必有所傳矣。

青蓮堂林翁。嚮遊歷到藤澤。因請寺僧。而影寫其
書携歸刊刻于家。翁令嗣半陰子。搨刷最精妙。墨
色光彩。與唐山諸法帖頡頏。遂爲十數幅。贈尚古
之友云。當年予亦得諸翁藏弆稍久。客歲編次。俠
客傳第三集。附載楠小公尺素。亦有是書在且也
腹稾。於後集將言藤房卿事。是以先重刊林翁拓
本。而剿入如前集。是它所藏墨本。尚有似此者。每
集貼簡端。又當如是。大方君子。勿笑予之好事。非
是爲人牽馬與同好而未得見者。蓋共樂之意也。
天保五年夏月大暑前一日　蓑笠漁隱撰

開卷驚奇俠客傳第四集總目録

壹卷

第三十一回 以毒製毒造化小配劑 臨機應變奸賊投名狀
第三十二回 暴論勵親雷九郎撈龍潭 夜察殺氣姑摩姫喪羣虎

貳卷

第三十三回 姑摩姫莎庭斬四賊 復一郎後門逞石技
第三十四回 喪子恨五十槌作僞書 投名悔荷二郎陷同惡

卷

第三十五回 誅柱主婦筆柿分贓財 誅殘盜就盛置放免

參卷

第三十六回 滿家二旋密策 楠女前知得失
第三十七回 假密使雙傳令旨 楠女俠明辨玉石

四卷

第三十八回 持永借山眷恋姑摩姫 正直稟屬漫做月下翁

五卷

第三十九回 女俠購死猿擬駿馬骨 心猿發狂大徵艾莽黨
第四十回 隱形術豪袁救長總 如醴交泰勝結荷二

總目録終 本集話説起應永十八年盡平九年冬十二月 其三十一回已上総目録見第三集首卷

誰到彼岸
地上風波
心言不亂
著作堂
楠供孫
手作て
賢蜱
垣衣翁
像贊第十九

月浅蝶子
あそまする
花ふるふゝむ
はつなる我
夏の世とも
さとゝ
雕窩老
畠山左馬介持永
篠持蝶鳥
像贊第二十一

殘忍虎狼心
穿窬老鼠牙
雷水散仙
五十槍雷九郎
五十槍雷次
像賛第二十一

湯浅風炉太郎
筆柿小紋二
雨たれて山やとなる神よ
ふたゝび耳をそばだてくまん
愚山人
像賛第二十二

金剛禪豪衷
和尚色中餓鬼
侍人藥裡斑貓
頼鳶齋陳人
北白川宮中將
俊雅
俊賢

遊佐河内守
信天翁

俠客傳第四集列傳追加姓名目録

將相 北畠俊雅　畠山持永　樂書田舞九郎　小山岡作就安

武士 湯淺風爐八郎敦義

浮屠 齊天行者豪袁

市人 賣油郎　藤松

强人 梁渡念珠七　八艘飛兼介　筆柿小紋二

通計十名　是他有司莊客强人之姓名俠者多有不數耆與第一集至第三集所録列傳一百十名共二百二十名

又云第三集三の卷廿七の右の四名は補正後の死と數と違ひたるとの不人もれどの正儀卿は當時從三位の南朝編年紀畧の系図とりく参議左兵衛督正後慶とあれば作者のあやまりかわるぶり

附て云第三集三の卷七の肖像の右は復市が竹藪の内に投石の処いその人物と看官ふ者誰と知せ。

と作者の稿本は故意名簿を附ざるに然るに何人の所為か推量ども其の人物の下に「さよ三郎」と書るは。

彫刻校訂の折數紛れて作者の心つかぬ也又同巻の廿二丸右の五名は義滿の薨せし歳月忘永十五年四月六日とある四月は五月のあやまりなるの餘も聊誤寫の看過しあるべし右の小夜三郎と四月は堪久に錯誤あれば程經なりと印刷の書肆は徒とりと示しやうなく改正せるべし既に數百揭出しる後なるをもて。

看官の為に云云と疑難もあらん六月の菖蒲十月の菊ふらひもなしとなるべし。

開巻驚奇俠客傳第四集巻之一

東都　曲亭主人編次

第二十一回　毒を以毒を制せ造化の小配劑　機に臨を変に應ず奸賊の投名狀

再説木綿張荷二郎が那財策の計略は塚見木兎六が深痍を負て登平樹の十々滅を刺て快く血刀を拭收め他が腰に附ける鍵嚢を拐奪て鈎索と共に帶に夾て走り出て隣なる獄舍の戸を開く野干玉の夜のやみ〳〵裏面に燈火を措ざるに其首に在りとかいへども約束なれば毫も礙説せず忽地聲を潛て長総の刀自出の木兎六が方僅結果けるに快出とはいへども聲に長総ありて応はあれども今は〳〵裏く胸を鎮めも果ず戰く膝を踏締て立を遲しと荷二郎は其獄舍に入て血に塗まる木兎六の屍骸を指て其迹示まを長総看つ舌を吐て呆るを半晌許且怕れ且歎ひて。

憶ぎもを額に加へて。恁るかゝ今より後の命をあん身に儘せんのみ。遮莫潜び寄ゆる首枷ありとも不便とせん術あるべと耳をけば荷三郎小さうと黙頭て呟てび腰に鍵を合せ出て。那這と合ゝたる長総が身枷の扁鎖を披き合せ棄て然而木兎六が要に帯くる脇指の刀を合てその身の帯る七首とが防御の與に長総に遞與して躱て出る折嚮に木兎六がとて来ぬる張燈撲地と蹴飛せば板壁の中を濺と滅る島夜に紛れて共侶は塀を乗んと後門に樹拉の方に曲折りゝたる子二の警言宵の雑兵二名うち連立て一個は左右に張燈と捍棒引提て出て来つ一個は鐵子木うち鳴らして。夜行々々とぞ呼聲も霜天に冴る一字路の撞見首に荷三郎長総折ゝると思へども避る路もなきのみ。些る怯まず無敵に本性荷三郎は長総と後に立つ。そが儘に遣違んとあくまでと先に找一個の雑兵性とまぐ引提る張燈高く推抗て癖者等と叫禁る息もせ荷三郎が閃めかす刃の電光棒と禁るも及ばぬ憐むべ雑兵ら。肩尖より乳の上まで砕られて苦と叫びもあへぬ命落したる張燈と推潰とぞ死でけり是ぞ噪ぐ一個の雑兵有賊ぞと呼ゝて。鐵子木刹ゝくうち鳴らして。逃んとせしを荷三郎は血刀うち揮趕蒐て破と殺るる刃の牙に水も溜らぬ後頭砕られて走る五六歩去向の石に跌て倒る折る殺れる首は鮮血に漬放されて一間あまり涙々と飛走るぞ怪ける。恁ること程に長総は今その支の為体に吐嗟とだに駭て怕れて身を潜して找る既にして雑兵ども砕れて透てぞ蒼然たる顔の色に吻とつく息も冬の夜に白く做りゆく苦中の憐集。そが伏走り近着けば荷三郎は雑兵の捍棒合れと耳に示してその身に躱て鐵子木と拷り合ゝて打鳴せば長総は捍棒と屋根に突響そ。那敬言宵の如くに走て外塀まで迫る。墻を踰塀を乗る。准備の鈎索あるをのそ荷三郎は開と投擲て長総と扶登てその身は輒くうち踰る猿猴の技に倣に似たり。左右まで外塀る城楼の邊に来ける。這里は石垣の高くして輒く登るべきもあら

ぬと。荷二郎が腰に附へし赤口鈎索のこるぐを伸せば十仞に餘る。扨墻索さへあるを
りて。開そうち樹つ長総と。扶板迄塀と無て稍暫際に下立つ。のろ〳〵這城塹を
最廣くて。七八間もあらんと思ふ。倘一葉の資を藉らざいふして渡支たれ然いあるま
じ。歳極の天の例よりも凍強うければ。斬の水酷く氷りて。棒のと敲くに突も破るまじ。
荷二郎悄々地に懽びつゝ。恋の石と索ひて。抬起して投試るに氷に特に厚うれば。爲
碎けまじ。打見て隨に石の前面走りけり。天の幇助と長総も又懽ひつゝ棒をちり〳〵に氷の上に
下立て。荷二郎に扶板迄。前岸に著て。造化微妙と。悄語して城と離れて。尚明ぬ
小夜の中山のくらを走く程に。四老村に来ければ。荷二郎に村盡処の孤屋の門傍に停止て
長総に耳とやう。我もあん身も這容を走ぶ人に怪められて。路の難を及びやせん。我為に
思ふ。もあれば。姑且這里に立ちて。共侶に逆旅の准備とせん。あん身に其頭に且ぞ。
と其ぞて後方に退け。躱て這孤屋の門忙く打敲ぞて。妖婦嘯やよ。鈍梅の刀自。村長刀祢の

使ふ。火速の要あり。快起まそと。両三番喚覚せば。内に応と回答して。連に火を鑽ち。
行燈に移して。躱て指燭して戸を開くに。鈍梅に。あらぬ。年は五十許の。一個の漢子
出て来つ。直夜半なれに長刀祢より使あり。と。何事ぞと問く。憶ぞ灯光を。面を照
て。佶と。和郎に木綿張荷二郎を。何の程に赦に遇ふ。牢と喻へに。あらぬと
いはせも果ぞ。荷二郎に怒を。聲を揚り立て。噫寝惚れ。畜生奴が恩を仇を。密訴の
返報。此を啖へと。拔駁に日光しる刀尖錯ぞ。件の漢子に。額を砍られて。叫苦とたゝに仰反
なる。身を稍起ぞ。三の大刀に尻を砍られて。颯と潰る。濃血を曳つ。又逃るを。遣らじと。找む
荷二郎に。透きぞ。奥に踏入たり。支の鬧動に。臥房なる。鈍梅に吐嗟。胸を潰して。逃ぞ
まるに。要背立ぞ人を。嗅んと。欲ぞれども。憶れて。聲もう出ざれば。横を被りて。又剥ぶ立まくまく。
平張りに。躱れ難たる。将場の雑子の。良人の危。躬も。身の危さに。かゝる。逢るり。程に。
荷二郎に。件の漢子の。背門に。逃んと。あたりし。艶鳥の。似く。趕稠て。韓竹割に。砍仆たる。

刃も拭いで引返せ臥房の内ゆい猶そゞ侭ゆ鈍や鈍梅ゞ横引被ゞて弥陀仏々々々と唱へたる頭髪を抓ゝ引摺出せば悶搖くゝ膝ゆ布締てゆそれ淫婦奴荷三郎るゝ恩ゝ仇做を報ひい恁ゞと責れば戦く呼吸苦しげゆ許しぬとゆ聲と共ゆ閃く氷の刃尖左右ゆ丁と操返せて胸前咽喉と刺串けば漬る血い喉と散りて壁ゆ撒り蔦丹葉野中の樗木も霽靂ゆ裂れて枯る命あり時あり虚空を抓で息絶げ然ば又荷三郎いゆ外ゆ人ゆ在ると四下を隈なく渉獵しゆ絶て人影もせざりゆゞそゞ侭外面ゆ立出て透し眺め長総を招紀せ其紀で權且入りて休ひゆとゆふ長総い訝ゆ思ゝ引れて内ゆ入りつゝるゆ主人とおぼし男女二名い那と這とゆ砍仆されて獵の獲の野豬ゆ似れば是い什麼とぞゆ怕れて退紀を せーと井荷三郎急ゆ披然めて訝りゆゞ這奴们い我とゆん身の仇ゝれば恁ゝ復したゞぞゆ ゆふて具ゆ報ぎい為ゆ訝く思ゝん支の情を説示さん欲冬の夜のと長ゆ暁るゆい尚程もあるべ今鮮諦を来歴をとゆ聞ゝ茶を沸しぬ冷飯をゆとも索出て腹を造りて遇へけれ先々とのひつゝもゝゆ身を起しゆ門ゆ立て人のゆ穿くと那這をゆゝ内ゆ入りて戸を引て楚と鎖ゆ合せ夫ゆゝ昔の処ゆ坐を占れば長総い胸安くゝぬと獨行ゞ侭ゝ土炕の頭ゆ凭りよりて螢ゞりの埋火を撥起しを焼着る柴の枯枝ゆ花火口移れば変る身の久後を儘せば人の自在釜洒家も尻を炙らんを去向を忌ゞぬ大胆安敵の荷三郎も土炕の頭ゆ膝を找ゆ卯胡坐落着貌ゆ聲を低めて喃俺妹児听ゝ方絶殺しなる男女二名い我とゆん身の怨敵ゝ這頭い名をとゝ存知くゝん曽根川と新阪の間ゆ丁る四老ゝ瘦村ゝれば隣舎を遠るゝ然ば又那衒妻い小夜三を誣る鈍梅を又那漢子い賣油児ゝ膝松と喝做しなる亦是這頭の獨脚児鈍梅ゞ與ゆい奸夫を甘舊の主人皺三い最吝嗇ゝ性ゝれば經紀ゆのゝ身をゝを入れ人交りをせざりゝ水川村人通て凡弾しを藪阪の名を肩しなる鈍梅い素より淫婦ゝ良人の酷く吝るゝと相貌の最醜ゝを疎ゝくゝ思ひん那膝松と密會ひゝ我も初い知ゝぬりゝゆ膝松も賭錢を好めば我身這地ゆ来ぬる比より一席ゆ連ゝ日もヨゝれば

疎々しき介程に膝松に有一日酒家に悄語くやう。和主咱们に憑れて我村なる皺三と結果てゝ
ゆらんが辛苦銭に小判十両程ともいへ給本日に取せん情由に依々箇様々々と鈍梅と夫婦に
なるまく欲する。縡の顛末奸夫淫婦の情願を送めるく示して旨く相譚れしに我いその折
賭ゆい輸けつ。那膝松に債もあり。素よりして介る筋に找を易く本性なれば言葉も礙
議を領にてあらんが左せん右しねと諜し合ひつゝその次の宵に這里の背門より潛入りしに折
うら主人皺三に猛可な發りし病苦に堪ぎ兼て打俯ぎうゝ嘆息く在りしと思ひの隨に刺殺
て計ひてどく板厨なる衣箱どもをんやり引出し皺三が亡骸を衣箱に斂て駱駝に折其
頭は置れし中刀ども掻攫ひつゝ走出て小夜の中山に赴ひつ然而その衣箱は山中なる山神の
廟内に卸して更に中刀は東へ距ること遠くもあらぬ山路に棄て走りしに亦慙ぎれる小夜こそ
らんが命運竭なる祥なる欲なる曉くに中刀を拾ひて衣箱と共縮せしなる四老人们に疑まて
命と隕ぜしのみにあらず身も鈍梅に誣られて分説立ぎ曽根川なる獄舎に囚れしに

奸夫淫婦に念願成就の時を待つと欲ひて幾程もなく膝松に數阪許後家入あて
鈍梅と夫婦になるまけり。然而前約の如くに我に那折十両金の辛苦銭を給れども介
後も亦左に右に賭銭に造化なりければ遂に膝松鈍梅们に銭を借んと幾番欲れて
豪丐なりけるに這奴们に推辭とを沼ぎ阿容々々として其度毎に此の銭を若しなる
ども竟に悪吉又の發覚ることやあらんと怕れけり。折々城主曽根川殿なる地方の
人を驅んとて悄々地縅捕の沙汰ありければ膝松鈍梅に折を給く夫婦商量をしけん。
有一日膝松に城にまゐりて酒家に騙賊なるよし彼に密許せしに我身に擒捕られ
なり。既に其の美を猜せしに我も亦那奴们を抱て奸淫悪吉又の始末を知るに易れ
ども。然しに我も皺三を殺しなる罪免れがたし。折々豫て面に言ひ
はく。如身に隣なる獄舎に在り憎きそも憎飽なる膝松鈍梅と仇と思へば悪に乳集を
憐愍の心も其首に起りたり。我に往処毎に脱獄の計策を設措ざるべけれども緊

の要の折の盤纏も亦身を脱る楷梯ゆも。せをやとりくべ豫もり。近江山路を疾措る。錢勇を
四見ゆ。と囚牢司の木兎六を結果る我計較首をいへば恁々之尾の箇様々々なりと辞
煩く解示せば長総の今ゆゆ復寐の夢れ覚る如く舌を揮ふ姑くは感嘆の聲を
沿断き恁て又荷二郎は長総ゆうち對ひそ我妹の奇偶と思ひ。澳津の騙局中山の危
難は我ゆせ一支れども竟ゆその身の必死を拯て。両個の仇を斃されば徳とあゝめ損ゆ
る一不思議の縁一といはまくのみとゆは長総額と拊て所謂と听けば過世あるて八重結び
せ一妹伏の奇縁脱れぬ中でありけんか。初は身が相計て中刀と棄衣箱を損る。七度
よりて小夜二郎が果敢く命を殞せ一は可惜ゆで伏れども。いろ〳〵如く這身の必死を脱れて
知ゆ雙言敵を斃る果されはゆ彩大恩特は智慧さ拵了支世ゆ捷れる主を見ば久後
憑ゆ力ゆ。と答る間ゆ稍焚沸る茶釜の湯氣と俱ゆ立ち。荷三郎は庖湯より飯櫃
索ゆて携来て各る装の茶陶冷飯一膳二膳三膳世東ゆ。儔稀る似而非胆勇残

るゆけゆの晝飯ゆと樫を拂ゆて身ゆ拭ゆ濡ゆと苞ゆ造らゆ。荷二郎は納戸ゆる衣皮箱さへ
銭財さ這那共ゆ引出ゆ来て。女服ゆば長総ゆ。三ッ四ッ五ッ襲被さゆその身ゆ着ゆ被
更ゆる有餘ゆ銭ゆ金ゆば送ゆ。腰ゆ纏ゆる舞ゆは倫
竊ゆ熟て脱落ゆ。冤家の東西ゆ火速の打扮適愛ゆ行装ゆ。戯れて步ゆ折
菅笠ゆ固縁頬ゆる。柱ゆ撫てゆける心ゆ。ゆ。究竟と掻合ゆ。沙菅笠を
長総ゆ遍ゆ。と俱ゆ四皓の村を離れて茂林驛ゆ。間道岐路人家遠ゆ山又山路を走
ゆ。先三河路のくさへゆ投ゆ。ゆ。ゆ在明の月さ笠を傾けて扶道ゆ脚小ゆ程ゆ
生憎ゆ天ゆ明ゆれど身ゆ暗ゆ影ゆ。ゆ。ゆ躰ゆけ。ゆ程ゆ曽根川の城内ゆ。曙宵の
雑兵三名の。枉死ゆ。ゆ。ゆ。

荷二郎
ひさ松
あそめ
荷二郎夜復密訴怨
有保第四十三

所為なべ。他們ハ獄舎と喻たるも塀を無り塹を渡りて出るとハ易くなべ。開頭ハ
騒れて在りもせず快索ひよと罵り闘ひて張燈蕉火打振々々樹の蔭屋の間まで漏
き隈なく渉猟りもせども。竟ハ往方ハ知れずして天いとうるハ明り時候外塹る塹の水の
上ハ葉くる扨墻索ありけるを人食やう為くて出りて原来荷二郎長総ハ這扨墻索を
りて塀を乗りて水を渡りて脱きりいまぐ他領ハ到らぬ程ハ快部として趕捕へよとその隊
配をいそがせども猛可の事ゆ雑兵聚合ひて左右まる程ハ日ハ升りて既ハ辰牌ハ過り時
候四老の村長荘客们ハ賊難の訴あり有司ハ是を訝りて縁由と糺るハ村長们ハ稟き
やう。昨夜真夜半のなべ村の經紀人勝松と喚做きもの宿所ハ強盗の入りけん。
屋主勝松と女房鈍梅を惨殺して金銭衣裳を奪去る。その迹既ハ分明なるよう
知せのハ如く驛路を風田舎ハあれば隣舎とハども遠ふ所を知るよりもいまぐ天の明
り時候畊き者の野田舎く折ハ見出して闘ひ立ることれば情由も往方も无古空古ハく。

照験とてハひぞとおそるく稟きハ有司们ハ是をうち听りその勝松いとある比丘人荷二郎を
密訴して捕捕せりの外ハ素より四老の經紀人なるやと問へハ村長然ハ他ハ我村ハ
賣油郎でひとり妻好もあるまじへハなる日村人艘ハ後家鈍梅ハ入贅して接木児で
いとのハ有司们領ハて然ハ勝松鈍梅们を砍殺して強盗ハ必定荷二郎ハ人若们い
いまぐ知ざるべ。昨夜這里ハも人を害して獄舎を喻る囚徒ハ。その儕ハ勝松ハ密訴
きる。木綿張の荷二郎と長総とハ賊婦ハ意ハ件の荷二郎ハ密訴の怨を復さんとく
昨夕脱れて折這里ハ躯て那里ハ到て勝松们を殺せりもん若们もその意を汲く
るべく賊の往方を索れよ実検使の義ハ听せ程遠ハ遣せべ。能立ち。
せば大家有一言糺そぐ俱退り出ける。介程ハ有司们ハ數五幾十名ハ荷二郎長
総们を趕捕へよと部して四方ハ遣りよと主君ハ使えわけて勝松ハ宿所ハ実検使を
遣り衆口を听定して穿鑿等困るべれども時後れるるれば竟ハ照験ハ因て

たつせうぬ。そね。くにぐめらころる。て。まあん。ゆぐ。
當城の主曽根川權頭高春い越ふ思念と旋らきよりと京へも鎌倉もうえあげたんふい。
ついか。のこ。ふま。そぐ。とう。ひ。
追捕ふ送る隈もあて賦い捕るべれども然でも當家の武備よ於て怒るふ似て影護かり。
ただ。ま。ゆむ。まん。ぎ。とぐ。
口ふの侭ふ寝べーと。悄ふふ斟酌ふ。その美と林ふめれーが。鳩鴉いよく高く飛て設の網い
ひとつ。やけい。ある。ふち。ぎ。
徒ふ野徑の雨相ふ朽ふけり。然い又鈍梅ぐ前夫皺三い村ふ名たくは慳貪児ふ。亡親の與よ
ずぐいあよ。うらがんど。ふせ。
香華院へ千蘭盆毎ふ布施もせず。墓い荒ても頽れても絶て詣ることのるけれぐ況親せ年忌
ふと。ぶも。ぶ。その折々ふ寺より促ふとあても法ふ延ふ世話ふも沒佛支ふ怠たろ世ふ
ふえ。ささ。
費ふる所ふ。ふ。と強面く答て。その説と容れを親のふ。ふ。邪慳ふ。一支と推て萬支ふ渉
る。心術と疎と果ふる所親い離れ村人い凡彈ーと交るめ。ふ。ーぐ他ぐ枉死の折ふる身ふ
い。のち。あれ。ぐふあひて。
入れて後と憐む商量敵の。ふ。ーふ甚麽ぞ。ぞ。ふ。ふ。ふ

やう。那曽根川い遠江ゑ口い是一城の主ゑふ既ふ他郷へ走りそ怕ゑふ足くれども倘将軍家へ咎えあげられて隈ゑく緝捕の沙汰あゑば這頭ふ在らんも由断ふ似さゑ我東国ゑ騙局火家ふ倘咎えるとゑあれ河内州石川郡千剣破村の稍盍処ふ五十槌電次隆光と喚做る。原是一個の豪傑あり并も強人の頭領ゑ名高る支黨ヨゑれども同郡の荘院民金ゑ相敬言て劫さゑ陽ゑ武藝の師範と倡へて衣食ふ支足る郷士ふ似されば緝捕の殃あゑ。ゑ年来ゑ歴る隨ふ折々他郷ふ赴て豪家ふうち入り商旅ゑ屠るゑ昔の藤澤道ふ提れる夜掙ゑ屡ゑるも幸ひ十て賽牛孺の刀尖ふ遇ふゑもあゑゑ倘他郷より石川郡へ梯了ふ来る倘児の那隊ふ隷ざるのあれば隆光ゑれゑ獵合ゑて斬て垂ぎとゑゑゑれば地方ふ於て盗難あゑゑ良賤各々安堵て夜も戸鎖さゑと咎えゑ河内の守護遊佐殿さへ是ゑの風聞ゑ受容れて右憑ゑれゑるゑ地方の扞城るべゑと疑ふゑろあゑばゑゑ徒れば河内ふ赴て請て那隊ふ従ひゑば緝捕の沙汰ゑ免るゑく身も亦俱ふ安ふ成べ。然ばゑく故ゑゑく婦人を俱て那首ふ到ちば相応ゑかゑゑと疑れん因て我又尋思あゑ。ゑ身ゑ千剣破の頭ゑ飯店ふ潜せ置我先獨那里ふ赴てゑく誘へて身の落着ゑばゑの折の時宜ふゑろゑ妻とゑゑるべゑ妻とゑゑべく倘ゑゑゑて婦ゑとも妹ゑゑとものゑ瞞めゑせんゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ。遮莫ゑ身ゑ我與ふ婦ゑ妹狹年歳ゑ知ゑゑ素生ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

一宿二宿と旅寝をする折々富士河の頭ゆそれ身の騙局ふ拙られるそれより後の憂苦
患難い豫て知れ一次第ふ伝る前夫ハ四十二の厄年ふ殺れ奴家ハ今茲三十とのひたく小
雲時口訥りそたりハ也伝るかーとふふ荷三郎黙頭て意ふ優るそれ身の素生鎌倉
武士の奥さるも落れぬふ谷川の水清ければ魚栖ぬ非除濁りふ従ふ世ふ倫児妻ふ
るるとも不自由さるる我ふあるも皆是過世の業因ふるとふ絶ふ恨いあり年ハ三十八
るるふふ酒家ふ一歳の姉ふれとも縹致よけれうちそあハ三十とふともけまるハあるも総て暴
挿と做きめふ常言ふふ三日平氏連ふふ向けば王侯貴人も及ばこかる樂をある我那五十
槌の隊ふ屬て今より河内ふ赴れいそ二の町敵で朽も果んや尺蠖の伸んとふふ且それ身を縮
むとハへ只當分の階梯のみ竟ふ一花開ふふ段もあるん等のひさと耳ふ示て慰ふる
長総听ふ微笑てそを憑ーくふるかーと応いあるも又ふ心のとふく思ふ既ふ今茲ハ旅宿ふ
暮て明れば応永十九年春正月の中澣時候荷三郎ハ亦長総とゐて河内の千剣破ふ赴

ふふ隊て計りー言の如く長総とゐて俗ふ千剣破村ハ程遠ふふ飯店ふ留置て荷三郎一個
身装ーて五十槌ふ宿所ふ赴くふ名高ふる地方の武人ふれば呼ふ隨ふ尋ねふ難ふ既ふ
その宅地ふ近つそて但それふ黒腰板ふ茅庇ある土墻と左右ふふる衡門の柱ふ標ふ打着て
五十槌電次と寫ーたれば問いでふ紛ふべくもあるふ門壁の内ふハ松あり梅あり折ふふ正月の天
るれば爛曼ふる梅ふ香の單葉ハ既ふ衰へるある。八重ハ南枝を盛りて其頭ハ書院の庭
るるべー東の方ふる孫廂ハ武藝の生徒の学剣所ふんとふふーくて連りふ相敲ふ木刀の音丁々
と聞えふ。登時水綿張荷三郎ハ角門ふ杖ふ入て呼門と両三聲立て来ふ若黒ふ茶く
うち對ひく小可ハ東囲ふ。御高名と景慕ーていふふ御門生ふふ欲ーふふ恁ハ推参仕
るふ第這一義のふふふふ亦ふ試んとふふ機密もあり拝謁の折方寸と盡ーまらんと欲ふふ
りれ。あのよ亦ふ亦ふーめかーとふふ若黨ふふ通て去ふふ小雨妻時等のねと応て奥ふ退りふ。
時て程ふふ又出て来て卒這方へと荷三郎ふ客房ふ迎入れて茶と薦めるぞーー程ふ学剣の

大刀音ハ寝ふけり。少選して五十槌ゞを下ろける。留日反鼠坊八出て来く。姓名と問ひ来意と訊て小書院へ案内をあけり。當下五十槌隆光いその子雷九郎隆成と腹心の支黨ろ名る。雲館竒峯五白鮫振平出水挺頭三们を左右ふ従へその身ハ上坐ふ布儲さる自主皮の裃ふ着て荷二郎ヨ對面を約その為体武備逞しく威風を示して一軍の大将の降人を見るふ異ろうねべ荷二郎ハ思ふ倍る威光ふ憚りて只平伏くるのみろうして隆光やよと喚かせ。和主ハ東國の人ろと欲我弟子ふるらまく思ゞ。訪れしよりる既ふ久ゞ相識人ろ紹介の書翰を以て齎しくると。向へ荷二郎否紹介の書翰とてハ少ゞも。小可郷ふ或人ふ君ゞ機密の趣と。具ふ伝ゆしよりる最甚く思ふとりて。恁ハ推参仕る介ゞ先小可ゞ素生をも告稟ものく。君ゞ機密の然るや否や。問試まゐん。左右を退けゆるかしと。隆光ゆ。へぎその説ろうゞ遠慮ふ及ばぎ我一家児ふ在る者ハ炊妾奴隷ふ至るまで一個も腹心ろうぬ。況這里ふ侍る人々ハ拙郎と塾生们と何ろ罪ふとあんん快ちち出ねゆくべしとふ荷二郎膝を找ゆ。ろうゞ愚衷を盡まろうん。小可ハ東國ゆ。年来騙局を宗とろれゞ些の殺計もハ〻ろ皆是足烏合の小輩ゆ。或ハ捕られて首を刎られ或ハ他郷ふ離散して去歳ろ夏よろ我身一個遠江ふ赴いて曽根川の城下ふ在りしふ知音の為ふ密訴ぜらまく城主の緝捕使臣ふ捕捕られ繫ろく獄舎ふ繫れまゞ索の断離しふ桶ゞ等しく又出づくもあらざりしと逆准備ゆ為ふあれゞ瘞笛の計畧ゆ。曽根川の囚牢司。一夕窃ふ刺殺しく。遂ふ獄舎を踰ろけれゞ密訴せゆ。宿所ゆ赴いて主人夫婦を殺ゆ果しく那宿限を復しゆ。徒而京師ふ赴いて春を旅宿ふ迎へかゆ西ハ相識る伴ゆる。君ハ我黨の大将軍ゆ。富ハ昔の金山ふ倍ゆ。人ども挺子ハ他郷のみふして地方の與ゆ害ふ外ろ来ゆる偷児あれゞ今ゆ。斬棄ゆふしまで鄙語ふ。龍蛇の略ハ蛇ゞ少知る其術精鋭長久の計ひ和漢未曽有今昔无類の豪傑とそ。ろうゞけれ因ろうふ小可ろうとゞ騙局の與の智嚢ハ長の知れる刀子細ゆ壁言ゞ一舛入る瓢ハ一舛の外入ろ所ろゞ如し五指の迭

代ゐ弾んよろ一巻ゐ優とゑ〜世ゐ立よ〜べ巨樹の蔭葛藤児あい巻れよとゐ世話さゝあるゐ今
よりあてのうでんゐゐ従ひて一挿ひせべ緑林冥加ゐ稱ひもせんと訪ひまつりーふ客を愛ひるあん胸
寛くゝあくあん見と賜ふーい悦び何事ゐ是ゐ如んや然ゞ良縁虚ーかゝで願ひの隨ゐ做ーゆゝべ。
適死力を盡さべいうで美ーのひひかーと舒る聲音の東訛も有般ゐ外を憚ゞと高かねども
委敬辯舌天ゐ拙言ひ地ゐ盟ひて赤心と示ゞまで一癖あるべひ面魂宣ゐ一人當千の本支を必
ある〜べーと思ひめゝ〜ゐけゐ〜ゐ中ゐ隆光い听ゞゝまでく領ひていうゝ趣その意をゐゐ既ゐ我武
名と慕ひゝ。機密も伺ゝ空ーとあれべ推辞ゝ死ゐあ〜ねども知音の紹介ゐひ美引かた
かゝ。約莫我隊ゐ属まゝ欲ーと初て這里ゝ来ゐゐめい非除知音の紹介ありとも投名状を晋
呈せばれべ留ゐとゝ允されゞ开も亦あゐゐめされーゝ狡と向れて荷三郎然ひその美ハ美知住ゞ
そハいゐゐゐ寫めゐゐん教さをめかーとゐゝと隆光ちゝ笑ひゝ徐ゐ左右をえかゝゝ汝遵件の投名
状の趣と示ーねといゝ大家阿と応ゐる中ゐ一人找歩荷三郎ゐゐち對ひてゐゐ木綿張刀祢を

ら〜初て御意と得ゞ咱们い當家の老門生雲舘奇峯五と嗚ゐゝゐめ目今向れー投名
状ハ筆硯とゐゝ做めゐ〜ゞ抑我老先生ゐ隨身の志願ありて初て這里ゐ来ゐゐめい見參の
贄とゝて約當郡を除くの外或ハ隣國他郷ゐ到りて單身ゐーゝ豪家ゐちち入ゝ或ゐ高
旅を剪徑ーゝ金銀美女と獲て先生ゐ晋呈をゐゝ投名状と命けゐ。その贄の佳ゝ
ものハ躰て股肱の列ゐせーゐ力其首まで至らゞとも遇ゐ儘ーて行客を砍殺ーて盤纏と倶ゐ
首級と実検ゐ入れまゐれば浪々の贄とせられて股肱の列ゐ入られねども隨身を允ゐ恒例都てかゐの
如。因て投名状の與ゐゐくゐ山城大和二ケ国ゐその邊近ゐハ一十許里遠ゐも二三十里ゐ過ぎれば
往還七日と限りとを出て七日ゐ及ぶまゞ投名状と晋呈せぶれゐ是則縁ゐゝ速ゐ他郷ゝ走りて
重て這地ゐ来べ〜ゞ足下這ゞと能せーゐゝやとのゐれて荷三郎沈吟ゐゐる肚裏ゐ思ゐ我ハ
騙局と宗とゐゝれば年来美女も財宝も畧奪ゐるヨヲれども不知案内ゐる里ゐ遣ーれて挿
んと欲ゐゐ往還絶ゐ七日ゐ七ゐゐ入ーん工心のとゐ。倘能せゞい是非ゐゐ〜更ゐ他郷ゐ赴ゝて。

聲玉堂印行

騙局で一期と過さば過さんそれ左も右もあるべき遥杳と這里へ来るべき。投名状を果さずして
そゞ俤影と躱せーゐどいられて後指と差れるべき最朽と成るべし要てもあれと立地に尋思をま
つて莞爾と笑て投名状の趣い初て美知仕ぬ何吉幸えと思いれ。その美るべき難くもあるべき七日の却間
明日もあつて小可その美と能きべ。とゞ大家訝りそ言男りに似れども投名状をその日中に果しる
めこれあるぞ。鬼神不測の術きくい似而非廣言あるぞと呆れて面と照まるまぞ傷痛くゞいけり。

第三十二回

暴論親を勵して雷九郎龍潭と捞る
夜殺氣を察して姑摩姫群虎と夷ぐ

登時雷九郎隆成。特更に惴雄なる後生の癖なれば恢へぞ荷三郎ふうち對ひて。木綿張
刀祢某い不肖なれども。主人の獨子五十槌雷九郎隆成之和殿目今投名状を明日とも等
たで能せんとゞなれいあるるくなり。神出鬼没の妙術ある狄その所以具にやまく欲きと詰るに
荷三郎怯る色なく。原来和君い老先生の令郎ぞとゞ神仙飛行の劍

術と成るるにあらぞ又投名状に日限あるぞ前知あるぞ準備あるにあらねど小可儒に曾根川城なる。
獄舎に繋がれるー折脱れ出るべ這地に到りて。當家の下風に立ぞと必ず田舎のあるべ有一夕
獄舎を喻る折隣れる獄舎に囚れる。一個の婦人と奪畧て俱して當所に来るぞその初見
参の牽出物に老先生に献上せべと豫思しーす志あるれば取も要さぞ投名状の贄に充
べるものにあらぞ抑路に人を害して東西を畧るい還て易く俱に圉圉の中に在る婦人を奪
ふい極めて難るい恁れば今より七日と限りそ。他郷に贄を渉猟んより件の婦人を投名状に
做さば捷徑にゆいぞ。とゞる大家笑局に入りて。そい又奇と称るる哉俱して婦人い何ぞ人
氏ぞ年い幾歳ぞ縹致い甚麽と問ぞ荷三郎とうて。件の婦人い民間に人と成るるれるい
ぞ又私窠嫖娼の類にあらぞ鎌倉管領家の寵臣なりける藤白隼人正安同の室なりーに
那安同い新田の餘類助則とゞに猛者に主従名残に敷れる不覚に外ぬるとその迹を
ぞ剰宅眷を追れーに那内室に只一個なる伴當と成て覚束なくも京師路投て向て折ぬ。

その伴當が偷児に似る疑ひを禀ーより。那身は薄情や近邊の村人們に殺され主和
は婦人に捕捕られて久く獄舍に殺されしその主従が寃屈の呵責に原小可が四老村の
人ふりんふ 嫁夫淫婦に憑れて外に薛子と移さんとそ棄てる東西を。那伴當が拾合する越度ふれり小
ぐれたのぎ 可這我と後悔しと憐愍の心も起りーに我らと云云と地方の城主に許て捕捕せ雖敵に
件の嫁夫淫婦們をれが恨えに堪ず逃脱の計策を旋らし既に獄舍を吸喝る折その罪な
ら女婦人と拯さて嫁夫淫婦と殺したり件の婦人に稍衰の花を年齢に二十八九三十ふの
ゑべーえ。なれども縹致に世に捷れてあらひざる辨才あり。走筆いと愛さ。縫刺の技にへ
ゆーえ詩歌管絃の技藝までも学びゆうとみづーらに。その名を同じに長総と唱做るめで
ひへ結ぶる便のあるも似る。只是奇貨とらいまくのこ。這寮ーの東西とそ。投名状の帳目
只今済ーあらーが幸ひれは優とあーど。と唱く辯舌爽に奥を添に説誇ると。隆光つらく
うち听て連りに嘆賞の聲を沼絶ず。益可は貌を改めて思に優る人に才幹その身獄舍に

殺されしと脱去るに即智その罪る女と憐きそ婦人と極ひーに仁その折に那恨あり。嫁夫
淫婦と殺せに勇と又美に婦人と獲ぐーそと遊女に售もせびみづーー犯ぐーけるに是則
信と義と況件の美婦人と。遥杳我に贈んそねて来にけるに礼忠豈その仁義八行を一箇さ
も紛ふ我黨に誰らあーえ且目今いられーどく。前徑ーと奪ふに易く囚徒を極に難ら
言の趣その意を沼ーう。快その婦人を俱ーと来ねに役に立べるめるーに隨身の気に拒障ーーとら
さて荷二郎怡悦に堪ず。その辱とふと先見矣に入れるーーん姑くせめるねと応て躯て衆人に
揖をーーく遽ーく旅店へとそ退りけ。却説木綿張荷二郎に鄭に長総と留措る飯店へ走の還
ーて長総と額と合ーと相譚ふと半晌許。那五十槌許赴ける。對面の首屋箇様々々と投名
状の難題まで言送もるく其報ておん身の與に面伏れども往還七日と限らある隣國他郷に
烟と張て前徑と支と做さとそもいふーと獲めるぞそと做ーるぞそ容られず這地に来る甲
斐もるく。後々までのふよるに羞と進退其首に谷りけれが已とを沼ぎ尋思を決め。箇様々々に説

課てん身をそ投名状ゐせられんとをとこゝ〜ゞとゆうゑ成就してゝ来てゝせゝとゝゝれゝゝ二世と契を
去挿頭の花を欲寓の與ゝ阿容々々と人の眺めゐるをとゝ最朽をゝ限りゝれゝゝ倩支を安ゝるゐ
件の五十槌父子を仆ゝ我五代ゝ頭領ゐ做登りゝをゝ亦ゝ身の心ひとゝゐゝ什麽ゝの議ゝ業ゝくゝゝと
問ひつゝ口説ゝ誘れゝ長総ゝ口呆れ果て速ゐゝ答難ゝうけゝ肚裏ゝゐゝゝゝ我身ゝゝゝ過世ゝゝけゝ富
も栄ゝ良人ゐ添ゐ遂ゝ家絶果ゝ小夜二郎と共侶ゐ世ゝ渡ゝゝ楽くて慰ゝ夏ゝゝん者
慙ゝ小夜ゝ禍鬼の出ゝゝよりて命ゝ殞ゝ我身ゝ縲縛の難苦ゐ遇ゝ冤枉の責ゐ死ゝゝゝと極ゝ
人ゝ寃家ゝ而ゝ騙賊の猾長ゝれゝ後ゐ禀ゝゝ恩ゝれゝ意ゝゝ身ゝ儘せゝゐ又強人の頭
領ゝ奉出物ゐせゝゝゐ産霊神の僻支狡餘ゝゐ人過ゝゝ薄命ゝゝゝゝゝゝ否ゝゝゝゝゝゝ
ゝ憂目ゐ遇ん狡測ゝゝ柱て權且ゝ誤ゐ就て又せん者のゝゝゝと琴思ゝゝゝ涙吐ゝ眼
包ゝ拭ゝ嗟嘆ゝて偶縁ゝを結ゝゝん身ゐ果敢ゝく棄られて見もせゝ人の妾ゐせゝゝゝゝゝ倒ゐ
死ゝと別れん哀ゝゝゝ八義ゐ倍ゝ恨ゝれゝゝ我身一公固の心ゝて後ゐゝん身の發祥ゐ階梯ゐゝ

よりもあゝゝゝゝを切てゝゝゐゝ甚麽ゝ情由ゝ示さゝゝゝと問へゝ荷二郎聲ゝ低ゝ然ゝとゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝ対ゝ縹致とオゝゝゝ一ゝゝ那里ゝ到ゝゝ側室ゐせゝれ正室ゐゝ做登ゝゝと疑ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

道号歴世さてるたちばなの
ながもさひろれてようるふ多ゑ
長總見引謁隆光
よる夜の秘の船やかひる表
ふり平
七ぞハ
雪ゆきたう成
ゑ屋の二ろう
有像第四十四

ふりこちたる
ふり三
きやう五

る人をして再まをすべきを呼入れて對面を登時荷二郎は恭しく隆光が前に對して御前に愚を
盡す投名状は即他の方へ見せまゐらせ隆光合点の上長総と熟看て頗愛さ
投名状偽て臺も疑念の木綿張は今日より股肱と憑む兄者の為に先盃を取せて長総
とも心を合せ俱に三男へ找ねと連の招に近つけ躰て盃を與へけり然は雷九郎が首
とて奇峯五郎坊は振平挺頭三の同悪仲も又改めて荷二郎と高後を契りうち和ぎ酒宴
酣に既び時候隆光は長総に筑紫琴を望まれ長総推辞の由もなく推居られる琴に操
将を浮る雲の富貴組は初老女の拙技合曲調を紛る音は稍衰の花に鳥藪鶯の已
が隨に囀るよりもあり引の山豪の耳は新に孰る佳境に入るに炊奴小嘆嘩すれ庖
湯の方より出て来て紙に隔て听るもヨヌるに倦て日は暮れ更闌て泥の如に酔なるければ隆
光は盃を稍盃盤と收めて辞して奥に退る折卒や臥房と覗せんと獨長総を携けり
以ある隆光は御前をその妻世と去りて寤寐の枕寂かに趣ある妾を獲るに

既に年才長るその子雷九郎は羞るを堪もあらず遂にあの夜を始として長総と俱に睦
るに他は素より淫婦の房事は鎖錬を男子と湯をする段あれば隆光は愛憐て巫山の雲
楚臺の雨は月は隠るとも花は雫今るとも侍る眺めに優とあ〜ゞと思べるのらうとしとして听
ざることを幾程もあらぬに推登して後妻にあらけり是より長総は家事を改てがらてまたく
威光あり荷二郎と見るとも宛奴僕は異なるまでと朽をかるるまでに荷二郎は悄々地にれを恨て
原来長総は恩は背て上人の衣領を着るるゝん然いと思いでいぬる比密談をするとさへあると
倘頭領は報もせが我身の安危其首は在りいふせまと齒を切て胸は焼く火の憤を洩さ
べたりとりと再思は旋まよ長総が這日屬我をいで尊大るは人の疑ひを受れども故意
強顔く以做まるべ然ると性起りて他を怨まば姉女子は劣る後悔あるん短慮は功を成
かて愚痴けると生悟して胸を鎮めて色もなきを見て老実は事るのるに長総が意は分は
わべ荷二郎はその身の與は再生の恩あるは似れど小夜二郎が枉死るもその身の四徒とるる

も初を推せば荷二郎が澳津の歌店の騙局を起しと。爾後も又幇と稼ぎる怨を思へば恩でも
亦。況他人面も脚も舊瘡の迹のまを。山猿に似る醜郎るを妻と喚れ夫と稱て長兄光
門を銷られんや。渡世いおを山豪で五十槌主の苦味ある郎態凛として。且一隊の頭領を画影
物のひさめさへ何処やらが前夫藤白主に似るのまを年の齢も少らず增さ那木綿張に
比れい五六歳可の兄とを面れと然とそ老朽ちる身もあるべ何を不足に三路懸るとわん
やと以へ鄉に荷二郎が示せ密策に載合せを他をること奴僕の如く最鷹揚に挙動へども有
數糸に支の破れと怕れて荷二郎が廂庇を借て母屋と含まんと欲ぬる那計較の趣と隆光に
報もせば左にも右にも機と撹て狐媚と逞しくまくちーが隆光のみく惑溺あるその身に他鄉へ
夜掙に出ぎるの子雷九郎隆成に下の衆賊と従て折る那這遣しるを夏の趣に第五
集五の巻の首も見えるる如し。看官前後の照応に意と屬を所々間話除煩に程に春い
行夏も過る是年の秋七月の時候五十槌雷九郎隆成い雲館奇峯五曽反紙坊八

白鮫振平。出水挺頭三木綿張荷二郎们と俱に三十許名の小嘍囉を率て夜掙の為に大
和路へ赴るが捌月の初旬に かへ来て各々功を献し那地の首尾を報ーが隆光に労
んとて次の宵酒宴の席と開て約莫五個の股肱们に小嘍囉も酒に喫して大か
るまを管待ーければ。盃の數巡る隨に迭に勍勇武藝に誇て。辯論口角をるもあり。隆
成ヤと推禁めて各位さのまを自屁考まるを。今番大和路をの夜掙も這頭顱員數に比
まが誇るべを獲めに然るを恁我大人の酒肉を費ーめを思へば倶に恥ぶをるまやと宥
られて驚ぶるを。大家ひとく頭を搔て現にるれいその理あーと。ひ〳〵ーに酒の過を酔てをい
ると陪話て貌を改めるを。登時雷九郎隆成い父隆光に対て向も諫亭せーどの用呈
ればいに甲非文字と呼ぶるーも已くをに夜掙の家法へ河内に住居の圖郡それ豪農富商
ありとのべも一度も犯ーめを故に地方の民に愛敬せられて緝捕の禍をを遠慮へ人の及ば
所をの理あるべをと称ぐ。そも亦時宜にるべを欲這里より程遠る及荘院に九と姑摩姫と呼

えゝ。楠氏の餘類也。正元の昔見るよりと。誰を知らんものも。且世の風聲耳ふ隱れもなき。他を男魂あり。父祖の怨を復さんと。悄々地ふ京師ふ赴き。室町の御所ふ偷入りふ支顕れて生拘られ頭を刎らるゝ。幸ひふ七赦ふ遇て。剩嵯峨の仙院より。金千両を賜り。却室町殿より。楠正直主殺後見ふ。故郷ふ還りぬ。時ふ八五月の比なりければ。件の金いと多く。那姑摩姫い刑餘の孤児。武藝胆勇ありとても。長の知れる国秀之我が那里へ夜襲して。件の金を奪ん。その事後ふ吟味あるとも。室町殿と仇て。寵ひ。のゝあれば良民の習されと同じから。守護遊佐就盛をふゆも是なり。斟酌ありて。緝捕の沙汰ふ及べからず。恁れば後安くも。天の與ると取られば還て咎を受るとふ。古語もあり。とろ吟くふ。恁辟近き。崇ろうん東西を合して。猶遠く。渉猟ふ。いろふ。怪々敷起ふ。と。席を拍て。説薦るを。隆光聽ふ。頭を掉て。その説決して。无用之。尤和郎が。那姑摩姫いと。恥ん罪人。呂定女子ふ。ふとて。再生の恩免あり。故郷へ還りぬ。室町殿も。悔りかて。思食されば。那叔父正直主とも。後見ふ。と。動静と。覘りぬ。件の

妙い。萬夫不當の武藝ふ長ふ。そ。我が。敷ふ。捕ふ。室町殿ふ。倒ふ。胸安く。思召まん。況。當四の守護遊佐主。物怪の幸と。ふべ。然ば。と。人も。憑ふ。毛。と。吹て。疵を求ん。後悔其首ふ違ふ。已ねと。制ふ。隆成。呵々。とふ。笑ひて。麒驥も。老ては。駑馬。及ぶ。大人の遠慮ふ。酷く。過ぐ。と。見ふ。豫ふ。計較ふ。そ。那荘院の光景と。密ふ。覘ふ。其頭ふ。人の。噂を。吟ふ。

三のひふ。姑摩姫ふ。仕るもの。若黨僅ふ一名。その餘ふ。奴隷。農僕。或ふ。婀嬛。炊妾。ふ。あるめいぬ。紀主の少女子。ふ。人當千の。男。あるとも。寡。と。衆ふ。敵せんや。克進退を。約束を。暗。歸。と。定。そ。前後の門。ふ。負數。と。盡。と。稠へ。ば。姑摩姫。三面。ふ。背。あるとも。防禦ふ。白這ふ。ぎと。敷。捕。丸。と。疑ひ。ふ。の。説ふ。任。ふ。の。ひと。勢ひ。猛く。説。萬。ば。あ。梟雄ふ。励。られ。ん。隆光。憶。ぎ。太息。と。吻。て。然。ま。ぞ。ふ。出。ま。ば。猶。且。衆。説ふ。憑。ん。の。ま。の。ふ。四。ま。と。かて。和殿。自今。吟。る。如。ふ。喜。の。利害。ふ。ふ。ま。ま。ふ。意見。ふ。ば。吟。ま。ほ。と。ふ。て。大家。阿。と。ふ。ふ。拒。ば。又。も。隆成。ふ。君。めん。と。ふ。ば。欲。迭。ふ。目。と。目。を。注。て。も。俱。ふ。醉。る。癖。れ。深。念。ふ。及。ば。那。這。る。異口同音。く。答。る。

やう。小先生の軍畧。皆悉その圖に當れり。非除姑麻姫勇婦とも。我們も亦本事あり。勝負を人に譲んや。思ひ立ぬ。力と謀て必勝の大利を俱に仕んと。隆光點頭て。こゝ〳〵人我も亦。俱に那里へ赴て。進退の指揮をせんと。内を知を要とを。間諜兒を遣て。よく虚実を探らしめべし。と。隆成やあ。その弟に。安房へ。兒逆那荘院の光景を覘て。方位廣狹悉寫一冊くろ縮圖あり。是商せと懐より出す件の繪圖一張を親の身邊おいち開け。奇山峯五鼠坊振平挺頭三荷三郎も燭甚堂の下に奔一膝を找め。親へ連に隆成の用意を賞讃し。けるに。中に電次隆光。扇を含て件の繪圖を。那這と指示し。是れ前門に丙に。又後門に爰と子に當れり。東向に矮樓あり。又庫藏。後と前に。這餘具るとも。假山金池。樹枝に漏を限なく。圖に在。前門より我們父子并に雲館曽反白鼓多勢と我も潛合べし。又後門に出水木綿張十四五名の。下に。暗號と違ば。操合し。勢に脱べ。その夜の挙に。凝滞なく。思の隨に勝に。奉るとも。人を殺さと功とさ。吾那貨財を掠奪して。快

退くを。至妙とも。餘に。機に臨て。変に応じ。とよく。その〳〵。光煉の提調に。大家感服し。義の母と。恐へ。舊の席に退くに。隆光に。改めて。不典を。又巡り。る。酒宴。奥ある前祝に。現強人の當喫も。吹擂猜拳。鬧し。中に。夜船を漕ぐもあり。羽立の命に。波を立て。惜し。紀國坐さへ。是欲海の底を。高量沙量も。杖子も。推並て。竟に。天の一網に。かゝる。毒魚の。これかゝに。酒菜。豆腐。山菜。身代に。裏を返して。骨を折る。異日夜倫の商量を。こゝまで。に。醉に。却説その。詰。豆雷九郎隆成。その身の。意見を。稍聽され。に。心勇を。雲。時もあり。その夜の人數を。定んと。五個の。股肱門を。促し。共侶に。親の身邊に。赴て。ゆ。商議に。及び。隆光。ゆく。眉を。顰め。て。那姑麻姫。武備に。疎く。農戸坊賈と。同じ。かく。ぶ。近邊に。那叔父。正直の。宅地。あり。個八九の荘院に。夜。毀を。入り。ぬと。伊知ら。ば。士卒。に。找を。我黨を。擊。捕らんと。欲べ。然ば。前後に。敵を。受く。進退難。戈に。及ん。孫其。頭の。准備。いかゝ。ぞと。問へ。隆成。微笑て。その。ども。豫。ぶ。あり。那正直。姑麻。姫の。叔父。あれと。中に。分り。不和。なると。室町殿。より。後見。せ。れ。と。這。戈。あ。り。く

推量るに夜襲のつもりあるとも正直決して極めがたく且その途に山川あり救ふとも速かなる事なるべしと云ふ隆光うち頷いて者ども人数を増て寄小屋を造り近邊に分處らに甲乙ゆも徇知て人咸汰で共侶に今宵更闌て襲ふべし時日を延さば十日巻の洲を悔恨と云へんん快らせたとこそ隆成のよく教びで小嘍囉を走〳〵つ那這に分居る五十七草賊を聚合て支の准備と做る程に這日も既に甘暮れ〳〵五十槌父子と五個の股肱們に身甲に肱鎧臑当をそなふ器械を引提て這餘相従に小嘍囉すで鎌鉤形を弁に被竜て腰に各山刀を跨て或は角弓に抓墻素竹槍捍棒隱形把火堀槌を肩に考るもあり打拚孰も物々考准備既に敷ぬ長絡の甲夜に炊奴をして五十槌父子その隊の賊に戦飯を薦め利運を祝して潜ふに目送りけ徳而五十槌電次隆光は是夜夜中の比及に先ず下の小嘍囉と五名六名宛出遣てその身父子に五個の股肱們と共侶に徐に八九村へ赴く程に子三刻時候に登時五十槌隆光八九の荘院に一町ばかり這方なる茂林蔭に衆賊を聚合て着到を検ふに約莫二十五名あり即便これを三隊に分ちて二十個の小嘍囉に隆光隆成頭領なる寄峯五鼠坊八振平を副頭領とし這它十五個の小嘍囉に挺頭五荷二郎を両頭領とし後に従へる挺頭三と荷二郎いその隊の賊徒を従へ手を投て赴けり姑且て隆光は梁渡念珠七八艘飛蚤介と喩敵なる両個の小嘍囉を召近着て苦們は墻喩闕隙に鑽る長なるを快姑麿姫の荘院に潜び入り那這に火を放て前後の門を開べ〳〵なる欲とを出でて立れば念珠七蚤介兼ねて身を起して荘院を望て走りけり左右なる程に夜は消丑に近ふ荘院に暗鼬の火も発らず鉄やとそ件の小嘍囉們ぞ来れば虚実を知れず大家太く待不樂で他們は日屬に似けもなく今宵の暗鼬のと避さよりは表けんと咲けば雷九郎焦燥て部詰に曽鉦る良人を等ぶ茶も冷る這里に物を思んと我身みづから潜入て快火を放て暗號せんとて走去んとてけるに隆光急に推止めて和郎は本事に覚ありとも後生の畢身に虎穴に入んは極て危しいざんとるに熟る一個の

老兵を伴ふべしとの事鼠坊八找出で願ひ在下小先生と倶に先登仕らんと云ふを隆光聞かずして和殿隆成と相資て那里に到らば支成りなん是はよく小心者なるかとあざ屬るを鼠坊八は応も果ぜず隆成は後をとりて走りける程に後門路潛寄る挺頭三荷二郎ら十五個の小嘍囉を引出だして左右をいらちも入るを豫期なりよりもあれば内よりの暗號の火の起るを今かと待ちけるに五三あんとおもふ時候まで萬籟聲なく寂寞たる心疑ひ相其れて今まで暗號の火の見えざるは必是故あるべしとの荷二郎沈吟して然ば前隊の者に人を走らして問ざせば怯れうとられぬ我先獨潛入りて内の虚実を覘ふべし今ぞ躊躇するとき白ふ悄語して孔墻索をうち掛け登りて内に入るを見て程五十槌電次隆光は雲館奇峰五白數振平ら倶に隆成ら暗號を待ちて是も亦その功を見ぬるを深る秋の夜の星の光を瞻仰て惆然として嗟嘆堪ず衆賊を伝と見耳を念珠と蚤入のごとく雷九郎と鼠坊八倶に暗號を錯へて生拘れ狡獪なれ狡支の安危を思惟るに曰ヨマくして吉少し然とも今ぞ他ら人を棄て阿容々と退く危路なり是非及ぶ

うち入れば我見の安危を看定て大家立ちと焦燥る提調を誰ら礙說もべ然いそげとて隨の隊伍を乱して莊院の前門に椎寄れば先に找ぶ小嘍囉を孔墻索を打掛て潛入るりの両三名共倶に降立て角門の戸折扇をいらふけ當下五十槌隆光は四下を急に見かるる前面に玄関あり右るのを庫藏あり左を則庭門なり竹の両折戸は半分開てあり原来我見もその餘の者も這里ろを入りつゝ這方へ找めと低語く先に立て入る程に忽地物に跌ぬを訝りるゝ小嘍囉に隱形把火を乗あて相まば是則異物るゝを歟斬るあるを鼠坊八は屍體ゆく韓竹割に砍らまたり倶に駭く衆賊はゝるゝ隆光連りに嗟嘆くゝ思ひ合れば我見も性命心と四下をとよと遽くぬてび找む庭の樹の下或る池の畔書院の這方に念珠と蚤介二名はゝるゝ雷九郎隆成も身首所を異にせ鮮血は草葉を浸ゝるゝ這光景に又駭く衆賊を励ま隆光も歯を切り眼を睜りく朽ぬ哉鼠坊八は三名るゝ我

たりてる

こまひめ
かくてあるとらのかうこはあらひとこ
衆賊不戰而辟易女俠神威
久しき智えやの山おろし風
有像第四十五
ふり平

三樂亭印行

第二集第五の巻のそめふ物語露ふまるれて後ふ一路ふあると気ふ一時這怒ふ看官前後を照もべー

児まで。殺させ。怨ハ九の世を易るとも忘るべくぞ。今い倒潛ぶふ堪ぞ。快打破く稠入ねね。姑麻姫主僕を生拘ゑ。殺さまーめく。鬼を祭らん。後ゑるせそと。敦囲る。聲共侶ふ奇峰五振平二十許名の小嘍囉を找めく。咄と入らんとーたる。書院の雨戸を東ゑ隅の。絶ふ一枚開ふくあり。ゑ。群賊其首ふを目もかけぞ。塀槌をもつく。雨戸四五枚一度ふ礮と打破て。稠入んと。競ふ。縁頼ふ。徨然と立る一個の美女あり。て。短刀を引提て。外目も恥らぬ奇俠の胆勇。内強く。外弱ゑ。閨衣姿の仮るがら。そもも。乱さ。孺子の帯。長ゑ袂を那這と。結ふて。翠。做ゑ。柳の。腰ふ。輭。竹の。雪の。肌膚。ゑ。ゑ。絲ども。化粧つぐ。清き月の眉花も。実もあふ。容貌い。問でも。ゑ。ゑ。姑麻姫ゑ。ん。と。猜。ゑ。ゑ。草賊們ゑ不意を打まく。阿と。ゑ。ゑ。奔一潑と。退。ゑ。ゑ。肩。甚麻ぞ。ゑ。ゑ。畢竟ふの。折姑麻姫ゑ。防戦ふ。勝開巻驚奇俠客傳第四輯巻之一終